

26 日本医史学会関西西部会総会案内(一九五七年) 精神科
医療史研究会蔵

〔医譚〕創刊者中野操博士への慰労会)

27 『自然』第一五巻第八号(一九六〇年) 精神科医療史研
究会蔵

(グラビア・日本の科学者④「小川鼎三」撮影・菊
池俊吉)

28 『日本医史学会会報』第一号(一九六八年) 日本医史学
会蔵

(二〇〇二年一月例会)

また江戸幕府寄合医師添田玄春の日々の暮し

深瀬泰 且

玄春の信仰

玄春は熱心な摩理支天信仰をもっていたので、その縁日にあたる亥の日には上野徳大寺に参詣にでむいた。ときには亥の日の前日にあたる戌の日にも、夜の参詣に出かけることもあった。玄春の母もこの信仰をもっており、その熱心さにおいてはむしろ母親の方にあつたかもしれない。元治元年からは信仰の対象が大国天にかわり、甲子の日にはかかさず浅草法養寺に参詣するようになって、摩理支天信仰はいささか熱がさめてしまった感がある。

妻おきせの暑氣中たりにさいしては、長男直次郎に浅草観音に護摩を焚きにはしらせたり、妻の実家にあたる江沢新兵衛とともに、川崎大師河原の平間寺に参詣におもむくこともあつた。信仰と行楽とはときに隣り合せの行事である。江戸時代においてはこのような傾向はけつして珍しいことではなかつた。

玄春の交際

添田家はどちらかといえば緒方洪庵をはじめ蘭方医との交際がおおい。「添田玄春日記」には伊東玄朴や大槻俊斎、手塚良仙、手塚良斎などの名がみえる。とくに大槻俊斎の長男玄俊と緒方洪庵の三女七重との結婚にあつては、添田家が大きな役割を果たしている様子がみえる。一方元康氏や野間氏との交際もみられ、蘭方医にかぎられていたわけではないことを物語っている。

江戸の華といわれる火事は、見舞という行為をとまなうことによつて交際の一環となる。日本酒を持参して火事見舞いや近火見舞いにかけているようすがかかれている。安政五年一月のお玉ヶ池種痘所の火災にあつては、自邸の近隣まで火勢が近づき塀を破壊して消火に専念したところ、幸いにして類焼はまぬかれた。この火災によつて種痘所は焼失し、その後泉橋通りに移転することになった。

玄春の趣味

玄春は多彩な趣味をもっていた。関本氏や杉本氏、あるいは高嶋氏と一緒に釣りに出かけている。巻菱湖の習字用の手本を大石氏から借用して手習いに専念した。一代将棋名人大橋宗桂に弟子入りして将棋を愉しんだこともある。

さらには本所で興行された「ハルケン」の見物に、連日のように通ったことがある。『見世物雑志』（小寺玉晁）によつて、この見世物が「ヤマアラシ」であることが確定した。家族ともども花見にでかけたり、寄席にでかけたりといういわゆる江戸の「行動文化」の体現者としての添田家の人々の様子がみえる。

野菜の栽培とブタの飼育

玄春の屋敷「蟻動館」はおよそ四百坪ほどの敷地である。その家屋の面積については不明ながら、かなり広い庭や空地があったものとおもわれる。その片隅を耕作して、畑としてナス、キュウリ、サトイモなどの野菜を栽培しており、秋にはブドウ棚から収穫したブドウを親類や友人にくばっている。

またブタ小屋には、一四頭にもおよぶブタが飼育されていた。江戸時代表向きは四足獣を口にする習慣はなかったが、その対象外とされたのがウサギとブタである。飼育の目的は患者の滋養、強壯のための栄養補給物、あるいは医学の学習に資するための解剖実験用であったかもしれない。

玄春の発掘者 島田筑波

現在までに添田氏についての研究論文は、昭和の初年にかかれた島田筑波の数編が現存するにすぎない。島田筑波（一八八六一一九五一）は茨城県の出身で、東京市職員となつて『東京市史稿』をはじめ『御府内備考』や『本郷区史』の編纂にたずさわつた。三田村鳶魚や森銃三とならんで江戸学の先駆者の一人である。一時は日本医史学会会員でもあったので毎月の例会に出席したり、ときには講演者として発表をおこなっている。昭和八年五月には「江戸時代の医家漫談」、同一〇年一月には「中村中悰と其一族」と題して二回の例会発表をおこなっている記録がのこっている。

(二〇〇二年三月例会)

日本における義肢装着者の生活援護史研究

坪井良子

本研究は明治初期から第二次世界大戦までの、わが国における義肢製作と利用・供給システムの変遷の実証的な分析結果を検討材料として、四肢切断者の生活問題がいかに解決されてきたかをたどること、戦後及び現在に至る、わが国独自のリハビリテーションの歴史を明らかにすることを目的としている。

全体は五章構成で、序章に続く、第1章四肢切断者の生活